

Kurt Koch 枢機卿、プロテスタント改革については「祝い」と「記念」を区別するべき。

(Zenit – Roma : 2016年10月26日)

教皇庁キリスト教一致推進評議会の長を務めるクルト・コッホ枢機卿とルーテル世界連盟の総幹事マルティン・ユンゲ師は、宗教改革500周年記念に際しての教皇フランシスコのスウェーデン訪問のスケジュールを発表した後で、記者会見で記者たちの質問に応じた。

宗教改革500周年は祝いではないという主張に関して、コッホ枢機卿は「祝う」と「記念する」という二つの言葉を区別しなければならないと指摘した。「祝う」という言葉はドイツ語とイタリア語では意味がことなる。イタリア語では「祝う」とは祝一色だが、ドイツ語では異なる（訳注、ドイツ語ではどのように異なるかはこの記事では説明されていない）。

・「記念する」とは何かをあるいは誰かを、喜びをもって、または悲しみをもって、荘厳に思い出すことを意味する。例えば、前者は戦勝を記念するというとき、後者ならキリストの死を記念するというのがそれにあたる。

『争いから交わりへ』の文書において、次の三点が取りあげられていると枢機卿は説明する。

- 1、感謝。私たちはプロテスタントとカトリックの間に共通のものを発見することができたから。
- 2、ルターは分裂を引き起こすとか新しい教会をたてるということを望んではいなかった。彼はカトリック教会を改革しようとしたが、あの当時は不可能で、その結果教会が分裂し、16、17世紀のおぞましい宗教戦争、特にヨーロッパを血の海にした30年戦争を引き起こした。
- 3、希望。一緒に記念することから、将来の実りが生まれる希望があること。

「第一と第三の点については、問題なく「祝う」ことができます。第二の点に関しては、私たちは償いをしなければなりません。それゆえ、どの点で祝うのかを理解する必要があります。

来週の月曜日（訳注、10月31日、スウェーデン南部のルンドのルーテル教会大聖堂での記念合同礼拝が行われた）、この記念を行います。カトリックとルター派がともに参加することは歴史上初めての出来事です。過去の節目の年に行われた記念行事は、大々的な勝利宣言や論争的な全面に出ていました」と枢機卿は述べる。

さらに、現在では500年前に起こった事件だけではなく、「ルター派とカトリックの間の対話が行われている50年も記念できます。ルター派との対話は、1967年公会議の直後に教会が始めた最初の対話で、それによって二つのグループの間にある共通するすべてのものを発見することができたゆえに感謝すべきです」と付け加える。

他方、ルーテル世界連盟の総幹事ユンゲ師は「教皇フランシスコの参加をもらえることは非常に意味が深いことです。我々は教皇が列席され、それが合同の記念行事に大きな価値を添えることにこの上なく感謝しています」と謝意を表した。

「我々は教皇フランシスコが（先の教皇たちが始めた）エキュメニズムの道を歩み続けておられることをしっかり自覚しています。・・・1999年に『義化の教義に関する共同宣言』に署名したときは、教皇はヨハネ・パウロ2世でした。2013年に『争いから交わりへ』の文書を作成したときは、教皇はベネディクト16世でした。そして今、教皇フランシスコはこのエキュメニズムの歩みの実りを収穫し、将来に希望を持たせています」と話した。

神学上の違いに関してどのように合意に至れるかについては、枢機卿は「教会一致運動は様々な側面があります。なかでもその基礎は霊的な性格のものです。まずは祈り。イエスは弟子たちの一致のために祈られた。・・

また大きな難問に関して協力して取り組んでいくという実践的エキュメニズムもある。この意味で「正統教会のバルトロメ総主教とアテネのイエロニムス大司教とともに教皇フランシスコが、難民のそばにすることを示すためにレスボス島を訪問したこと」を挙げる。その上に、神学的対話があるが、「これはそれほど簡単ではありません。義化の問題のような越えがたい問題が過去にありましたが、今日では大きな前進が見られています」と言う。

教皇庁のスポークスマン、グレッグ・バークは『争いから交わりへ』の文書を読むように勧めた。